

詩即興朗唱公演のチラシです

<< 作成日時 : 2007/10/05 20:04 >>

2007年10月2日

今月27日(土)に「銀座モリギャラリー」で行われることになった、詩朗唱(佐土原台介)とピアノ(氷見進)のジョイントコンサートのチラシが送られてきました。

小生(佐土原)は詩朗唱で出演するのに、何と刀道の制定道着を着てワラを斬っている写真が掲載されています。間違ったのではないということです。わざとその写真にしたということなので、小生も訂正を申し込みませんでした。説明を聞かされていない人は、刀の試斬が行われるのではないかと、期待しているかもしれませんね。

でも、目の前に客がいるような場所で刀を振るえば、幾人かの死傷者が出ることは確実です。従って、27日には刀を振るうことはありません。期待されている方には気の毒ですが、ここは言葉の刃で、皆さんと切り結ぼうと考えております。単独での公演なので、即興だけではなく自分の詩(書いたもの)の朗唱があります。

ピアノの氷見さんは、「ビートルズからクラシックまで」幅ひろく演奏の出来る人で、ジャズはもちろんのこと、即興演奏も自在にこなします。また、詩人の飛入りゲストも用意しています。二時間弱のジョイントライブを心ゆくまで楽しんで下さいね。

開場 17:30 開演 18:00

<銀座 モリ ギャラリー サロンのご案内>

佐土原 台介 & 氷見 進

ジョイントライブ

即興詩人佐土原台介氏とピアニスト氷見進氏の異色の顔合せ。
お互いのユニークな個性が発揮され、音楽や詩の多様な面白さに
思わずうなることでしょう。



●氷見 進 (ひみすすむ)

大阪府生れ。高校在学時にジャズに開眼。
大学時代より都内ライブハウスで演奏活
動を始める。詩人とのコラボレーション、
フリーインプロビゼーションなど試みる。
現在、茨城県日立市在住。ソロ演奏会、
天球コンサート、NHK水戸放送局など
で演奏。



<プロフィール>

●佐土原 台介 (さどはらたいすけ)

1941年 愛媛県宇和島生れ。
1979年 詩劇団運動体「ウラヌス」を結成。
各地で公演。
1990年 ニューヨークで、ベーシスト吉沢元治
氏とデュオ及び、折原美樹さんを加
え三人で各所の公演。(自作の英語詩)
又、日本古武道の全日本刀道連盟に
所属、真剣を用いての実戦刀法の習
得に励む。
1996年 音楽の人道との即興演奏と、詩の
即興創作を連動・確立させる。
現在、「刀道・文武両道塾」主宰。
全日本刀道連盟本部道場師範・教士七段。
日本文化普及会「藍の会」創立会員。

後援：日本文化普及会

10月27日(土)

時間：午後6時～9時

会費：3,500円

(飲み物、軽食付)

※当日は席の都合上、必ず下記まで
予約をお願いいたします。

銀座モリギャラリー

〒104-0041

東京都中央区新富1-16-8新富町営和ビル5F

TEL03-5541-2070 FAX03-3537-7202

Email: morim-p@gol.com



■地下鉄有楽町線/新富町駅3番・5番出口徒歩3分
■地下鉄日比谷線/八丁堀駅・築地駅徒歩5分
■都営浅草線/宝町駅A1出口徒歩8分

料金 ¥3,500(フリードリンク、軽食つき)

場所 銀座モリギャラリー

大沢在昌の本

<< 作成日時 : 2007/10/08 11:20 >>

2007年10月8日

私は今大沢在昌の小説にはまっています。

ただ困っていることが一つあって、彼の小説を読み始めると、他の事に手がつかなくなってしまい、結局はその日一日何も出来なくなってしまうからなのです。贅沢な悩みかもしれませんが、相当悩んでしまうのですよ。

この休みを利用して(三日間)2003年刊行の小説『天使の爪』上下二冊(974頁)を読了しました。米CIAとロシアSVR(旧KGB)の対決にまで発展するスケールの大きなサスペンス小説で、一気に読まされてしまいました。(それまでは同じく図書館から借りてきたドナルド・キーンの大著『明治天皇』を読んでいたのですが、かなり専門的な評伝であり、面白くて一気に読了というわけにはいかないので、忍耐強くぽつりぽつりと読んでいたところに、大沢の本を借りてきたものですから、ホッと気を緩めた瞬間に、「天使の爪」が突き立てられたという訳なんです。『明治天皇』については、いつ読了できるか見当が付きませんが、そのうち読後の感想を述



べる積りです)

さて、大沢の小説です。彼の小説は『新宿鮫』以来、日本の警察機構への痛烈な批判が軸になっています。この小説でも、CIAの思い通りに動く日本の警察の右往左往する様が、半ば戯画化されながら描かれています。その本質を一言でいえば、「体制のメンツにこだわって、小回りが利かない」ということに尽きます。マスコミの目を必要以上に意識し、重大な犯罪に対して思い切った行動が出来ず、都合が悪いと思ったことはたちまち隠蔽してしまう、という陰湿な体質を、大沢は全ての小説で指摘し糾弾します。ただし、その中で活躍する主人公の警察官は、マスコミの目などくそ食らえと大暴れするのです。機構からも世間常識からも大幅に逸脱してしまうのですが、正義のための活躍ですから、結局は体制側もしぶしぶ認めざるを得ないという構図になっている訳です。そこが泣かせ所なのです。

この小説は、CIAとSVR(エスヴェーエル)それに警察庁公安部の三つ巴の攻防だけではないのです。脳移植と麻薬という問題が絡んでくるから面白いのです。「仁王」と徒名された巨大な体躯を持ち、なおかつ体術に優れ頭も切れる、これ以上ないという理想的な警察官と、かつての恋人で脳移植という途轍もない手術を受け身体は別人となった女性麻薬取締官がコンビを組んで、巨大な悪と殺人鬼に挑みます。

脳移植は現代医学では技術的にも倫理的にも有り得ない設定ですが、小説でそれを可能にさせることによって、自分の脳と別人の身体の融合によって必然的に起こる、拒否反応と人格の分離という大問題に作者は迫ろうとしています。「仁王」は、かつての恋人である河野明日香の脳を信じ、途轍もない美人の肉体を得たアスカを一体として愛そうとするのですが、脳の明日香は、男のタッチに敏感に反応

する別人の肉体に嫉妬し、その肉体におぼれようとする「仁王」に不信感を抱いてしまうのです。そういう関係でありながらも、コンビを組んで悪と戦っている内に信頼関係を取り戻し、脳の明日香は美人の肉体を自然に受け入れるようになる、というラブストーリーが大きな軸になっています。

この小説は以前に読んだ『天使の牙』という作品の続編であることを読んで知りました。興味をもたれた方は、『天使の牙』を最初に読まれると分かりやすくなります。

さあ、いよいよ『明治天皇』に取り掛かるぞ。一杯飲んで、決意と勇気を鼓舞するんだ。

明治天皇」上巻読了

<< 作成日時 : 2007/10/14 16:34 >>

2007年10月14日

大沢在昌の小説から一気に滑り込んだ「明治天皇」上巻566頁を読了。

初めは遅遅として進まなかった頁も読み進むにつけ速度が速くなりました。上巻は、父帝孝明天皇時代の幕末からはじまります。その時代に起こる激動の出来事は一般の歴史書を見ていただくことにして、天皇家とそれにまつわるエピソードのことなどについて、若干の感想を述べたいと思います。

孝明天皇が英邁な方であったことは本書で繰り返し述べられていますが、自分の考え(攘夷、開国不可)が幕府によって次々になし崩しにされることによって、晩年は政治に対する情熱が薄れ、後宮に閉じこもる日々が続くようになったことが語られます。様々な女性との間に皇子皇女六人生まれましたが、無事育ったのは皇子(後の明治天皇)ただ一人でした。

また明治天皇についても15人の皇子皇女が誕生しましたが、育ったのは5人だけというきわめて低い生存率で、同時代の農家よりはるかに低いものであったそうです。従って、成長した祐宮(さちのみや)に対する孝明天皇の期待と喜びのほどが察せられるわけです。

しかし孝明天皇は慶応二年(1867年)天然痘によって崩御します(一説には毒殺)。翌年睦仁親王(むつひと 祐宮)踐祖。わずか15歳の若さです。新天皇の若年を良いことに、取り巻きの公卿や重臣たちが、勅諭と称して天皇名で勝手に布令を発したことは容易に察せられます。驚くべきことに、孝明天皇在世中に発せられた倒幕の蜜勅なるものも、二人の公卿の手で勝手に作られたことが分かっています。明治新政府を手中にしたかつての幕末の志士たちや公卿たちは、天皇がい

つまでも15歳のままでいてくれたら、と願ったことでしょう。

しかし、当然のことながら天皇は成長し大人になります。不平士族の反乱、西南戦争を経るに従って、自らの意見を堂々と述べる事が出来るまでになった明治天皇は、しきりに地方への巡幸を行い、病院や学校を訪問し、時に手土産をご自身で購ったり、下賜金を下されなどして、民情を理解することに努めます。

そうして15年の月日があっという間に過ぎ、憲法発布の手順にまで漕ぎつけるのです。尊皇攘夷や佐幕の思想が交錯し、日本人同士が凄惨な切り合いを演じていた頃からまだ20年にもなっていないのに、日本はあっという間に西洋列強を模した近代化にこぎつけ、強国の仲間入りをしたことに、この本の作者のドナルド・キーン氏は驚嘆の賛辞を惜しんでいません。そうして、憲法発布の緒準備に国論が沸くところで上巻は閉じられます。

私は今平行して二十数年前に中央公論社から出た『日本の歴史』全26巻を二回読み返し今三回目に入っており、第16巻「開国と攘夷」を読み終わったばかりのところですが、『明治天皇』とダブっているわけですが、一方は、幕府(武家)側から描いた幕末、一方は皇室(公卿)側から描いた幕末を同時に読んだわけで、感慨深いものがあります。

さて、下巻は日清、日露両戦争という大事件が加わります。明治天皇は何を考え、何を命じたのでしょうか。読み終わり次第また報告させていただきます。



春原武彦さん他四人展

<< 作成日時 : 2007/10/28 23:13 >>

2007年10月22日

小生の友人であり優れた絵画作家春原武彦さんを含めた4人の作家たちが銀座でグループ展を持ちました。

その初日に松坂屋で買った芋焼酎を一本引っ提げて、六丁目にある「ギャラリー アーチストスペース」へ出掛けました。もう一人小出英夫さんという造形作家が加わっていて、その人も昔からの知り合いです。

こじんまりとした空間に大勢の人が詰めかけ、すでにパーティが開かれていました。この二人を除く他の二人は初めて会う方々で、あまり会話をすることもなく注がれたワインのグラスを片手に、作品を観て回りました。

春原さんの作品は絵ではあるのですが、手書きの作品にコンピューター処理を施して、版画の一種であるリトグラフに似た作品に仕上げるという風変わった作風で知られています。しかも個展の度に作柄を変え、精力的に新しい画風を打ち出してくるその創造性は感嘆すべきものがあります。

宴たけなわの最中に、春原さんの知り合いとおぼしきいかにも作家らしい風貌の中年男性が入ってきて、作品を眺めながら、しきりに「惜しい惜しい」と呟いているので、初対面ながらその訳を聞いたところ、描かれている絵の一部がピカソの作風を彷彿させるというのです(写真の絵)。



小生もピカソは良く観てきたので似ていれば「おや」と感じたはずですが、言われるまでまったく気が付きませんでした。というより、強いて似ているといえは「そういうところがあるかもしれない」と思わないでもないのですが、私の見るところでは、完全に自らの想像力でピカソ風を凌駕しており、何ら問題はありません。その人に「ピカソはお好きなんですか？」と言わずもがなの質問をしたところ、「大好きです」と答えられました。なるほど、自ら愛しているものの磁力に全てを引き寄せてしまうということかな、と自問自答しその場を離れていきました。作品というものは、鑑賞する人の立場によってどのようにも変化し、変貌してゆくものであるということを、今更ながらに思ったひとときでもありました。写っている人物の内、一番手前が小出さん、その隣りが春原さんです。



詩朗唱とピアノのジョイント

<< 作成日時 : 2007/10/29 23:42 >>

2007年10月27日

この日は台風接近の報があり、朝から激しく雨が降っていた。数年ぶりの詩朗唱公演というのに「なんちゅうこった👿」とグチをこぼしていたのであるが、どうにもなるものでもない。

朗唱予定の作品を取り揃えるなどして準備を整える。気圧が下がっているせいで、頭が重くひどく憂鬱である。そういう時は風呂に入って全面的に湿ってしまおうと風呂に入ることにした。身体全体が湿ってしまうと、頭が少しクリアになった気がした。👴

用意を整えて二時過ぎに家を出る。天気予報では、夜に入って関東地方は暴風圏に入るとのことで、暴風雨襲来の真っ最中にポエジーの声を張り上げていることになる。「日ごろの行いがよほど悪いのだ」と思わざるを得ない。

ピアノの氷見さんと会場で4時に合うことになっていたが、すぐ近くまで来たときにまだ3時半であったので、近くにあったうどん屋でピリ辛みそうどんを食べ、ビールを飲んだ。🍺相変わらず雨は降り続け、風も少し出てきたようであった。ビールのお蔭で、気分は上向いている。

氷見さんはすでに会場に来ていてオーナーの森和子さんと談笑していた。やはり台風のことが気になる。5時を過ぎたあたりから、風雨はますます強まり、予約キャンセルの電話が入ってくるようになった。たとえ客が一人でも断固やるぞ、と氷見さんと語り合う。

ジャズドラマーの中村達也さんが早々と駆け付けてくれ、気分は盛り上がる。着ているトレンチコートが上から下までずぶ濡れた。6時の開演間際になって続々と

客が詰めかけてくれ、たった一人を前にしての公演という最悪の事態を免れることが出来た。飛入りでの詩朗読を予定していた葛原りょう君も遅ればせながらやってくる。

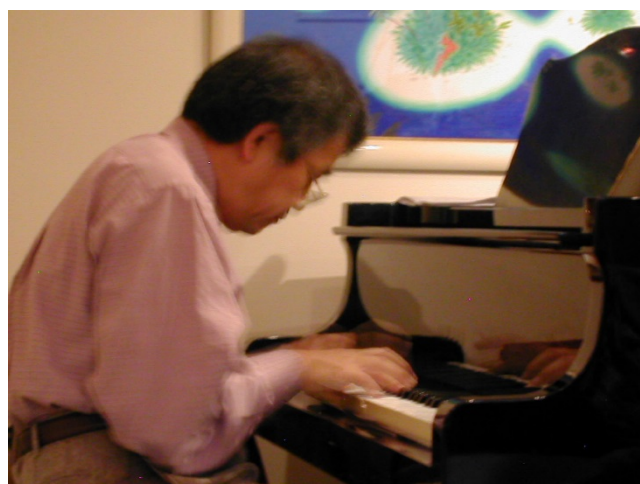
定刻に開演。司会の女性の進行でギャラリーのオーナー森茂さんの挨拶があり、小生の詩朗唱と氷見さんのピアノの文字通りの競演が始まる。私は、10年前に出した詩集『メガロポリス狂想』から「骨片の落下」「天地交響―巨樹の内奏」の二編を朗唱。氷見さんの力強い鍵盤の響きが脳髓を叩く。外は暴風雨の真っ只中だ。そういう状況が逆に気分をエラボレイトしてゆく。一部の最後は、数年ぶりに書き上げた「溶けてゆく私」という作品を音なしで朗唱。

15分間の休憩で飲み物が出る。ビール、ワイン、焼酎、酒、なんでもある。実に心強い限りである。二部の冒頭はりょう君の自作詩朗読。彼は短歌もやっていて、福島泰樹さん主宰の短歌誌『月光』の巻頭を飾ることになった数編を絶叫朗唱。次は氷見さんのソロだ。ガーシュイン、ビートルズ、ベートーベンと、一聴脈絡が無いようでありながらまとまっている一曲、といった形の面白くもスリリングな演奏があり、🎵最後は客から題をいただいての即興である。

気ままに題をだしてもらおう。台風、月、夢、花、薔薇、といった脈絡がまったく無い言葉がポンポンと発せられる。👤🌸🌀🌹それらをうまくつなぎ合せて一遍のポエジーを創造しなければならない。20秒ほど経った後、氷見さんに開始の合図を送る。冒頭に出てきた言葉は、夜空に煌々と輝く月だ。暴風雨との対照がひらめく。空はあんなにも晴れて煌々と月が照っているのに、私の脳髓の中は風と雨が吹き荒れている。そこに夢が重なってきて私の意識を遠くに連れ去る。夢が現実の人生であり、現実が消え去ってゆく一遍の夢であることが語られる。意識はどんどんと高まり、言葉も高揚感に満ちてゆく。私は物語ることを止め、物語を壊すことに

意識と言葉を集中させる。ついに「直径20センチの頭蓋の中の宇宙よ、大脳も、小脳も、視床下部も、海馬も全て溶け去って一つとなり、暴風雨となって吹き荒れよ」と絶叫する。ピアノが破壊をさらに打ち砕こうとガンガンと響き渡る。もうどうともなれという心境である。極限と言っていい。

思ったとおりの終わり方になり、気分は存分に晴れた。後の、飲食を交えての客との団欒で、即興を絶賛する人がいて、私を勇気付けてくれた。10時を過ぎて帰る頃には嵐も止んでいて、天も燃焼しきった私たちを祝福してくれているようであった。🌈





そばきり寄席 亀戸東庵

<< 作成日時 : 2007/11/04 23:46 >>

2007年11月4日(土)

ピアノ弾き語りの江戸賀あい子さんが、落語家と一緒に亀戸の蕎麦屋でライブをやるというので、出掛けることにした。

江戸賀さんは、今年六月に催された「がらがらぽんⅣ」(江戸東京博物館大ホール)でステージに出た仲間である。彼女は舞踊の部で唄を歌い、小生は武道の部で刀道の演武を行っただけの仲にすぎないのであるが。

普及会の仲間である山後、鶴見の両氏を誘い亀戸駅で待ち合わせる。あらかじめ地図をコピーしておいたので、駅から20分ほども歩いたが、場所はすぐに分かった。少し早めに着いたので、隣りのお好み焼き屋で鶴見さんと一緒にビールを飲む。

定刻に少し遅れて開演。客席は狭いがほぼ満席状態。初めは入船亭扇辰(せんたつ)師匠の落語から。総武線で会場にやって来る間の出来事を巧みに話しの間に取り込みながら、仏教伝来から長野善光寺創建の由来に至るまで、面白おかしく語られ、突然閻魔大王が登場してさらに話しの奥行きを与える。地獄の亡者には石川五右衛門やホリエモンが登場する始末である。

荒唐無稽な趣を呈していて、その一見無秩序な筋立てに笑いが止まらない。古典落語とのことであるが、縦横無尽なアドリブが、ことさら可笑しい。この落語家の才能を示している。落ちに至る筋立てを書くとながくなるので省略することにする。

続いてあい子さんが登場。狭い店にでんと構えられたアップライトのピアノを弾きながら、ポピュラーな歌謡、自作の作詞作曲の曲を、軽快なテンポで歌い上げる。低音も高音も声が良く通り、歌手としての成熟した歌唱が心に沁みた。

休憩を挟んで再び扇辰師匠の出番。これも古典であるが、やはり、随所にアドリブがさしはさまれる。色っぽい御新造の声と、下女の声を巧みに使い分け、粹と艶の世界を作り上げる。高度な芸である。笑えばなしで涙が出てきて、ハンカチで拭いながら嘸を聞いていた。

打ち止め後は、出演者が参加しての飲み会。思い思いに酒や蕎麦を注文して歓談に耽った。手打ちの美味しい蕎麦なのであるが、20名ほどの人たちが一度に注文することになったので、注文した品が中々出てこず、白けてしまう場面が度々あった。予想できることなので、注文の品を限定するとかして工夫が必要である。20回もやっているというのであるから、同じことを繰り返しているとは思いたくないのであるが。

蕎麦焼酎の蕎麦湯割を三倍もいただいてしまう。蕎麦屋にはこの酒がやはり一番良く合うようだ。時間が来たので、名残を惜しみつつ東庵を三人で後にした。





ポエット・カフェ・ライブ第37回

<< 作成日時 : 2007/11/17 02:09 >>

2007年11月9日



この日のゲストは、我が国では珍しい女性フラメンコ・カンテの第一人者遠藤あや子さんと、フラメンコギターの名手日野道生さんのお二人。日野さんはこれまで二度出ていただいたが、遠藤さんは初めてで、彼女の歌声を聴くのも初めてである。

開始は7:30からなのであるが、打ち合わせのためということで、5:30の开店間もなくにお二人が来店された。しばし雑談の後打ち合わせ開始。初めて聴く遠藤さんの美声に、準備の手を休めて聞き惚れてしまった。スペイン本国からやって来た女性カンテを公演で聴いたことがあるが、男性と同じように渋みのある野太い声で歌っていた。

ところが遠藤さんはしわがれたようなだみ声ではなく、その顔付きのように良く響

く澄んだ美声であり、その声の響きと声量なら、クラシックであろうがロックであろうが演歌であろうが、どの分野でも第一級の歌手として通用することは確実であるとおもわれたほどである。

ポツリポツリと客も姿を見せ始め、ライブの雰囲気が次第にかもし出されてくる。定刻に開始。12名の客で一杯になる狭い店であるが、予約の無い客も飛び込みで入ってきて、寿司詰め状態となる。

気の毒なのは、トイレに近いところに席を占めた客で、誰かがトイレに向かうたびに立ち上がって通行の間隔を開けなければならないことである。同じチャージ料を払って来ているのに、不公平なことこの上も無い。かといって、飲み代を一杯分安くしたりしないのが、店のずるいところでもあり公平なところでもある。

日野さんのギターも以前聴いた時と面目を一新したように繊細で、時に激しく、ま



た情緒に富んでおり、我が耳を十分に堪能させてくれた。

歌い演奏するゲストと一番近い客は、一メートルほどしか離れておらず、演者たちの息遣いや胸の鼓動までつぶさにわかるほどであり、場合によっては、歌い手のスバキを浴びることにもなる。演者にとってはやりにくいということもあるであろうが、客にとってはまず有り得ない状況であり、感動もまた別の高ぶりをもたらす様

子である。

素晴らしい雰囲気の中に20分間の休憩を挟んだ一時間半にわたるライブが終わった。それでも誰も帰る人がいない。グラスを片手に客と出演者の歓談がいつ



果てるともなく続く。これがライブなのだ！この夜は、小生の詩即興朗唱が入る余地もなく、完璧なエンディングを迎えた。

刀道全国大会&古武道演武会

<< 作成日時 : 2007/11/20 21:53 >>

2007年11月11日(日)

全日本刀道連盟の全国大会も今年で20回目となる。初代会長である中沢敏先生の没後10周年にも当たっており、20周年記念大会と銘打ち、会場を日野の高幡不動尊に設定して、古武道演武会を兼ねた大きな行事となった。



小生はここ数ヶ月日野の本部道場に行っていないこともあって、会場設営等何のお手伝いも出来ず、団体戦出場のみの一剣士として参加した。会場は都内でもほとんど唯一と言っていい五重塔の半地下に設けられた台講堂である。そこには本尊である阿弥陀如来像が置かれている。五千円の参加費を払いお土産の紙袋に同封されているパンフレットを覗いてみると、古武道の参加団体が20ほども記載されている。



当初は小生も演武で参加する予定でいたが、これだけの参加があると時間の制約もあり、主催者側の参加は無理ということになり、辞退したといういきさつがある。参加団体は、ブラジル、韓国、沖縄、大阪、静岡、東京、栃木、埼玉等、国外にまで及ぶ国際大会といってもいい規模のものとなった。

10時定刻に開会宣言。多数の来賓挨拶の後、団体戦からプログラムの開始。小生のチームは、即席の混成団体。先鋒、中堅、大将の三人を一チームとして、二チームずつトーナメント方式で優劣が争われる。三番の札を引いた小生の刀道チームが、秩父の神刀流チームとトップで争うことになった。先鋒はこちらの勝ち、中

堅は負け、大将の私が勝てばチームの勝ちになるところであるが、水平の二本斬りの一本を倒してしまい、見事に斬った相手チームに負けてしまった。そこで参加者としての私の出番は終わりである。



早々と着替えを済ませて、残りの団体戦、各流派の演武を楽しんだ。団体戦は各チームとも良く稽古を積んでいる様が見受けられ、見ごたえのある試合となった。次々と勝ち進んで優勝をしたのは、先鋒小学生、中堅中学生を含む無双直伝英信流(居合道)のチームで、会場を埋めた観客から熱狂的な拍手が送られていた。各古流の型はともかくとして、試斬は初歩的なものばかりで、業の多彩さと実戦刀法の迫力では、刀道が一番優れているとつくづく思った。来年は必ず演武者として出演することを自らに誓う。会場で旧知の仲間と出会え親しく会話することが出来たことは収穫の一つである。

小生と一緒に 写真に写っているのは、以前刀道の仲間であった山地さんである。彼は、いま北辰一刀流の師範となっており、目黒道場主である。



明治天皇下巻を読み終えて

<< 作成日時 : 2007/11/20 22:14 >>

2007年11月16日(金)

先に上巻を読み終え感想をこの欄で綴ってからすでに一カ月が経過している。二度も図書館に出向いて再借り出しをしている。その間放っておいたわけではなく、毎日少しづつしか読むことが出来ずにいたわけである。

休日のこの日、残りの百数十頁を一気に読み上げた。五時間ほどの時間がかかった。上巻566頁、下巻582頁の大冊評伝を読了した感慨は、格別のものがある。

この本には、多出する天皇の勅語が古文体で書かれていて(訳文が付けられているのではあるが)それを読み込むのに、多少の労力と忍耐を要するのである。それが重なると眠気を催し、頁は閉じられる。

上巻読了の感想で、下巻は日清、日露の戦争が記述されることへの期待と気持ちの逸りを述べておいた。しかし読み進んでみると、様々な国家的事件が頻繁に起こっているのであり、そうした事件と向き合う天皇の反応や言葉が興味深く綴られている。

ただし、天皇は喜怒哀楽の感情を滅多に外に出すことは無かったといわれる。たとえば、日露戦争で旅順陥落の報せをいち早く天皇に伝えに出向いた参謀本部次長長岡外史が、一刻も早く勝利の報せを天皇に伝えようとして、まだ玉座に着座していない天皇に向かい、歡喜の表情を浮かべながら戦争の勝利をお伝えすると、天皇は無表情のまま二三度かすかにうなずいただけであったという。長岡は落ち込んでしまった。

かといって、天皇が喜怒哀楽の感情を持たない冷徹無比の人であったわけではない。ときにいたずらを仕掛けて大笑いし、飲食の席でテーブルに一滴でも酒が残っている以上席を立つことなく、ことごとく飲み干してしまったという。

暴君的な要素はまったくと言ってよいほど無く、臣下の言うことにはことごとく従い、真夏の行幸の耐え難い暑さの中で、一言の苦情も、また苦痛を訴えるということも無く、蒸し風呂のような鳳輦(ほうれん)の中で正座したまま揺られ続けていたという。

この本を読む限り、立憲君主の見本のような人であつたらしく、ロシアやドイツの皇帝のように独裁権を欲しいままにすることはまずなく、有能な臣下に政治を任せていた。むろんそれら股肱の臣下ですら決着がつかないような局面では、自ら聖断を下すことはあつた。そうしたときの聖断がことごとくツボにはまつたのは、有能で果敢な元老や侍読がいたからである。

天下国家の政治(まつりごと)に携わるそれらの人物を鋭く見分けて、枢要な役職を割り振る眼識がなかったなら、日清、日露の両戦争に勝ち抜くことは出来なかったかもしない。こうして日本は、一気に世界の一等国の仲間入りをすることが出来たのである。

天皇崩御の後、外国のある新聞は「睦仁(むつひと)は日本の名高い天皇の一人であつたというだけでなく、現代世界の偉大な君主の一人だった」という記事を書いたという。比較的平穏であつた大正時代は、明治天皇の遺産で過ごした時代であつたといえる。しかし昭和に入って力を付けておごり高ぶった軍部が、露骨に天皇の大権を犯すようになる。

もはや昭和天皇には、明治天皇のような臣下に睨みを利かせる力は無かつたの

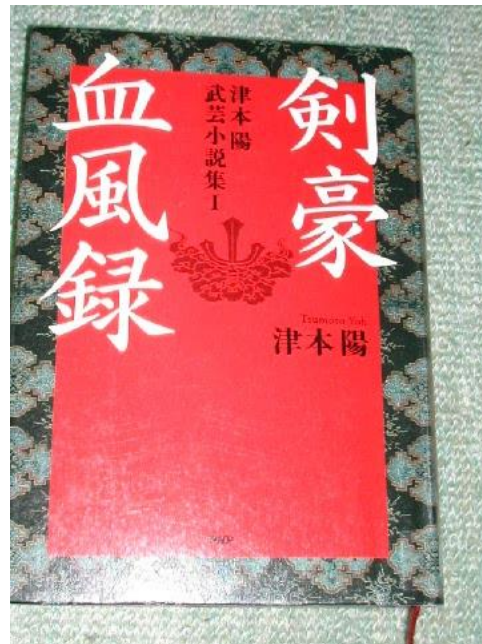
である。日露戦争に勝った奇跡に等しい勝利は、軍部を抑制の効かない怪物に仕立て上げてしまった。後は暴走して自滅するのみ。

実はそのレールは明治時代に引かれたものであった。だが、日本民族の、高飛車に出やすくおごり高ぶった驕慢な民族性は如何ともしがたく、連戦連勝によって継続された精神の高揚がもたらした歴史の必然を、もはや誰にも推し止めることはできなかったのである。

剣豪血風録』津本陽 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/02 02:08 >>

2007年11月23日(金)



津本陽が新しい剣豪シリーズを出してこようとしている。

その第一冊が表題の本である。副題に「武芸小説集 I」とある。津本は名だたる時代(歴史)小説家であり、私はそのほとんどを読んでいる。おびただしい作品を物しているので、代表作はこれ、と名指しすることは難しい。強いていえば、信長を描いた『下天は夢か』と言えようか。

彼の時代小説の顕著な特色は、主人公の生地の方言をしゃべらせていることにある。信長なら名古屋弁、西郷隆盛なら鹿児島弁、竜馬なら土佐弁といった具合に。どの小説でもその方法は変わらない。信長が全編一貫して名古屋弁で会話するその新鮮な感動は、今もって忘れることが出来ない。作品に強烈なリアリティを与えている。

他の時代小説には無いその新鮮さに惹かれると共に、もう一つの特色である剣豪小説にも他の作家には無い面白さがある。津本は抜刀道の大家中村泰三郎先生(古人)から真剣刀法を学んでおり、若い頃竹刀剣道をやっていたこともあり、作中で解説される刀法がすこぶる理に適っており、深く納得できるからである。著作は数多いが、東郷重位を主人公とした初期の作品『薩南示現流』は傑作といつてよい。

だが、たくさんの著作を読み進むうち、作品に類型化がみられ(特に男女の関係)興を殺がれることが少なくない。物語構成に難があるからである。

そこで本題に入るが、表題の作品集は、雑誌に書きなぐった作品を寄せ集めた感がなきにしもあらずで、はなはだ雑である。著名な名人・剣客がずらりと書き並べられているが、主題が定まっておらず恣意的な記述が多い。

これまでの通説と異なる記述を心がけようとすることは理解出来るが、新しい資料を発見して書き加えるというわけではなく、文章の量を確保するために、勝手に「新たな事実」を、これぞ小説家の特権とばかり捏造(想像)して延々と書き連ねている箇所が多い。塚原ト伝、宮本武蔵、柳生十兵衛の項などがその良い例である。

しかも史実とは異なる記述さえみられる。「柳生十兵衛」の項で飯篠長威斎のことが語られるが、彼を新当流としているのは間違いで、神道流であるべきであり、参籠したのは鹿島神宮ではなく香取新宮である。墓もそこにある。どうやら塚原ト伝と混同しているようなのだ。揚げ足を取るようであるが、それほどに書き急ぎ、殴り書きの感があるのであり、彼の小説のフアンとしては何とも残念というしかない。第二集もこのような調子であれば、作者に直接手紙でも出すしかないであろう。

天狗剣法』津本陽 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/08 03:16 >>



2007 年12月2日

『剣豪血風録』と共に図書館から借りてきた津本の一冊である。

副題に「法神流須田房之助始末」とあるのを目にして心が躍った。法神流開祖榎本法神(うめもとほうしん)については、小生のHP『五七五七七剣豪伝』で取り上げたが、須田房之助はその道統を継ぐ二代目である。

この本の話の骨子は、著者自らが注記されているように、高崎市在住諸田政治先生の著書『法神流聞書一実録 蘭原騒動一』にほぼ全面的に依拠している。

私はこの本を18年前に読んだ。その18年前に実は私は諸田先生とお会いしたのである。(そのとき先生は80歳に近かったから、ご存命なら90歳を優に超えられておられることになる。三年前まで先生と年賀状のやりとりをしていたが、その後賀状は届いていないので、もしかしたらお亡くなりになったのかもしれない。)

前橋市に戸山流抜刀術師範の偉い先生がおられるという噂を私が聴き付け、そこからそう遠くない桐生市に住む友人のF君(野太刀自現流をよく遣う)と語らって押しかけて行ったわけである。前橋市の御自宅で奥様の接待を受け、3時間ほどもお話をうかがった。

そのときまだ20歳後半であったF君の太い腕と体格を見て先生は、「あなたは持って生まれた剣の資質があるようだ」とおっしゃったことを憶えている。私ではなく、友人の方がそう言われたので、多少気落ちしたのは確かだが、刀剣や、剣術や、古の剣の名人達人にについて雄弁に語る先生のお話に引きずり込まれ時を忘れた。

色々聴いた中で特に印象に残ったのは、「かの山岡鉄舟が、50歳代で亡くなったのは過度の飲酒が原因である。およそ剣の名人達人と言われるほどの人は、酒で命を縮めるようなことはしないものである。鉄舟は幕末の偉人と称えられ、悟りを得て一流を開いた剣の達人とされるが、そういう死に方をした鉄舟は、私に言わせれば二流の人物である」と断定されたことである。

長生きすれば良いというものでもないが、酒で早死するような生き方は名人達人の理想とは程遠いということを言われたのであろう。そういわれても私は鉄舟が好きであるが、「なるほど」と妙に納得したのである。

津本の本の中身に還らなければならない。榎本法神は、赤城山麓の山中に仙人のように暮らし、医術を良くし、森の中を飛ぶように走る人間離れのした剣術遣いであつたとされ、その教えを受けた房之助も神通力を身に付けたといわれる。その超人的な強さが返って禍となり、地元の剣客に決闘を挑まれた挙句、(剣術ではとても勝ち目がないというので)相手方に銃で討ち取られる結末を迎えるのである。

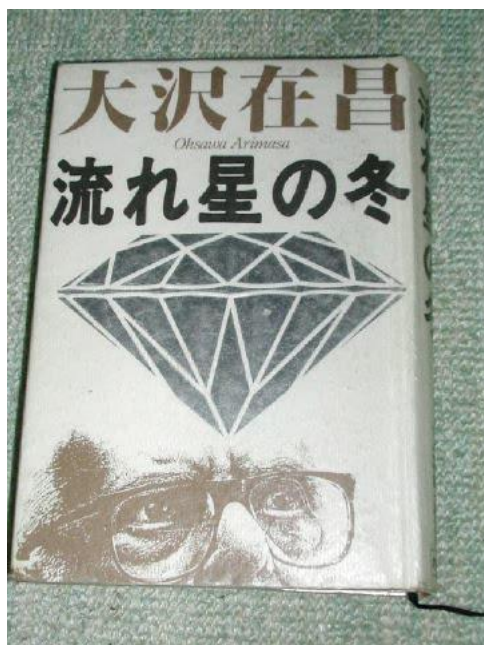
同じ郷土の先輩として須田房之助を尊敬し、百数十年前に起こったその出来事

を調べ上げた諸田先生は、房之助の無念の最後を惜しんでおられる。ところが、津本氏の小説は、房之助は討ち取られることなくその場を逃げ延び、他国で一生を終えることになっている。当時の文献によれば生存説もあるようであるから、津本氏の小説の結末が間違っているとはいえない。ただし、諸田氏は、房之助死亡はまず間違いないとほぼ断定されている。

法神にしても房之助にしても、剣術史の主流から外れた存在であるが、過去のどんな名人にも勝るとも劣らない達人振りは記憶しておくに値する。

大沢在昌『流れ星の冬』読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/10 00:11 >>



2007年12月7日

この本は今から13年も前に双葉社から発刊されており、このところ毎年のように出されている大沢の新刊書を読破している小生としては、古い本を掘り起こして読んでいるかのごとくであるが、図書館の書棚に並んでいる未読書を手当たり次第に借りてきて読み漁っているだけであるから、年代や著者の傾向の変化とはほとんど関係のない次元にいる。

この本の主人公は、短大の教授を勤めながら悠々自適の生活を送っている葉山という65歳の初老の男である。現在は教授などをやっているが、実は40年も前に窃盗団の一員として世間を騒がせた犯罪者なのである。しかし、悪事が露見する前に窃盗団(流星団)は解散され、5人いるメンバーの誰一人として逮捕されることなく全ての事件の時効を迎えている。従って過去を気にすることが無ければ、大手を振って大道を闊歩出来る立場にいる。

ところが40年前に盗みに入った家で、その当時のお金で時価数億円を下らないと思われるダイヤモンドが入った袋をみつけ、処分が出来ないままリーダーの手でどこかに隠される。むろん全体の共有財産であるから、それぞれに隠し場所は知らされるが、抜け駆けで掘り出すことは硬く禁止される。それをやれば他の仲間によって草の根を分けても探し出され、処刑される手はずである。

ところがあることがきっかけとなって、ダイヤを手にしたのが主人公の所属していた窃盗団であることが、元の所有者によって突き止められ、ダイヤ争奪の攻防戦が始まるのである。その破格のダイヤは国家が絡む裏で取引の材料に使われようとしたのものであり、表に出るべき筋のものではない。それゆえに、ヤクザやCIAや右翼の大物が次々に登場する。

様々な駆け引きや攻防戦の後、ダイヤは葉山が手にし、自分がことの他可愛がっていた甥の命と引き換えに、裏社会からのし上がってきた大物実業家の本拠地に乗り込んでゆくのである。そこで西部劇まがいのピストルによる決闘などが行われ、葉山が勝てばダイヤは自分のものとなり、負ければ(当然死ぬことになるから)本来の持ち主である大物実業家の元に還ることになる。

撃ち合いの末、弾は当たらなかったが決闘相手の発作死によって葉山が勝ちを制し、ダイヤは葉山の手に一。しかし―――結末は本を読んでもらうしかない。

著者の意図は、敗戦直後の混乱した社会と現代とを鮮やかに対比させ、名も無い短大のありふれた一老教授として現代社会を生きるかつての泥棒のサムライ復活を、西部劇もしくは時代小説のヒーローよろしく描くところにある。裏社会に生きる人間に熱い血を吹き込む著者ならではの物語の展開は、毎度のごとく、本を下に置かせない圧倒的な面白さがあるが、絵空事を感じからいま一つ抜けきれないものがあり、二流の出来となっているというべきである。

電車の中で

<< 作成日時 : 2007/12/21 15:54 >>

2007年12月14日

ここ数年電車の中で目だって気になる現象が2, 3ある。

その筆頭は、出入口を背にして突っ立つ人が増えたということである。ということは、つり革につかまって窓の方に向かって立つ乗客と向かい合うということを意味する。昔から日本人は面と向き合うことを避けてきた。「眼(がん)を付ける」という言葉があつて、それが意識されると喧嘩になっても不思議ではないほどである。従つて、出来るだけ面と向き合うということを避けてきた。それにも拘らず「面と向き合い」「眼を付ける」わけだから喧嘩を売っているに等しい。例によって特に若者が多いが、向き合うことになった人たちは、下を向いたり、目を背けて在らぬ方を眺めたりして、目と目が合うことを極力避けようとしている。周囲の大多数の乗客と向き合う若者(時としていい年をしたおじさんもある!)が、乗客から文句を言われたり、喧嘩を売られたりすることを覚悟して立っているとは思われない。

彼らは面と向き合うことがどういう結果をもたらすかということに、何らの意識がなく無自覚なのである。日本人としての最低限の礼儀や恥じの感覚が失われたということを、いまさらあげつらっても始まらない。彼らにとって自身とかかわりの無い人間は、たとえ目の前にいようとモノでしかないのである。従つて何ら気にする必要がない。満員電車の中で化粧する女もおそらく同じ感覚である。目の前にいる人たちがニンゲンではなくモノであれば、一人化粧台に向かって入念に化粧することと何ら変わりはないのである。

つまり彼らの意識状態は、自分だけが実在の人間であり、直接関わりのない他の人間は仮想現実(バーチャル・リアリティ)なのである。ゲーム機の中の存在な

のである。短絡的で、将来に対する想像力がすっぽり欠如した殺人(特に尊属殺人や自殺)もこのカテゴリーで説明できる。罪を犯して初めて自分がやったことの意味を悟るのである。

どうしてこういう事態になったかということについては、学校や家庭での教育や躾の欠如、儒教道德の失墜、自由主義社会の享受等など色々な要因が絡み合っていると思われる。こういうことが原因だからこう是正すれば改善する、といった生易しいものではないと私には思われるのである。

断言できるのは、全世界を席捲しつつある欧米文明が存続する限り、人のモノ化や安易な殺人事件は増えこそすれ減ることはないであろう。イスラム教国が、アメリカを敵視するのもアメリカが欧米文明の代表格であるからであり、地域に根差す独自の文化・風習・美德を破壊してしまうと感じるからなのである。

アメリカナイズされた現代日本人も、古来より伝えられてきた日本独自の文化・風習・美德に、もっともっと注目し育てていかなければならない。いま私は、電車の中で向き合って立つ若者といつ喧嘩をおっ初めても不思議ではない精神状態のなかにいる。

「Kの日々」大沢在昌著読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/23 15:29 >>

2007年12月20日



昨年の11月双葉社より第一刷発行。

この人の作品を読むことを無上の楽しみの一つとしている私としては、今まで読んでない本が図書館の書画に出ていれば、何はともあれ借り出す手続きを取る。そうして、どんな用事であろうが、剣術の自主稽古に出掛ける時間になろうが、一挙に読了してしまわないと気が済まないのである。

むろんこの本も例外ではないのであるが、この本の眼目となるある仕掛けがその時点で解ってしまい、本来ならわくわくとさせるような驚きの結末が「やっぱりー」という感慨で閉じられることになったのは、多少残念な気がしないでもない。

少し前に出版された『パンドラ・アイランド』という無類に面白い本を読んでいなければ、或いはトリックに引っ掛かり結末に唸らされていたことであろう。つまり、「パンドラー」で使われたのと同じ手が用いられており、見破るきっかけを作ったわけで

ある。

それにしても大沢ともあろう人が、たった数年間の間に、物語のキイとなるトリックを二度使うなんてことはあってはならないことである。熱烈なファンであるだけに残念至極（多少残念一から語彙が昇格！）であるという他はない。

とはいえ、物語の展開の仕方は第一級であり、一気に読了まで突き進むことが出来たのは、さすがというべきである。三度使うということはまさか有り得ないであろうが、もし次の本でそういうことがあったら、私は氏に直接手紙を書いて想像力の衰えを糾弾し、執筆の休業を勧告する積りである。本当にそうしますよ、大沢さん。

村上春樹『海辺のカフカ』上下 読後感想

<< 作成日時 : 2007/12/23 18:06 >>



2007年12月23日

このところ、本格小説或いは純文学といった分野の小説はほとんど読まない。面白くないのである。ただし、村上龍の芥川賞作品『限りなく透明に近いブルー』、中上建次の小説作品はほとんど目を通した。近年では、金原ひとみ『蛇にピアス』を興味深く読んだだけである。

どうせ読むならということで、池波正太郎、藤沢周平、津本陽、鳥羽亮(司馬は7, 8年前に全作品を読了)といった人たちの歴史時代剣豪小説、大沢在昌、楡周平、宮部みゆきなどのアクション推理警察小説を手当たり次第読んできた。

昨今読書界で取りざたされている村上春樹などは、図書館の書棚にずらりと並んでいるのを横目でやり過ごして今日まで来たのであるが、ついに今年の初め、『ねじ巻き鳥クロニクル』という上中下にわたる大冊に手を出した。といっても二巻目の半ばまで読んだだけである。

布団に横たわって本を読むことが多いのであるが、『ねじ巻き鳥一』を読んでいる

とすぐに眠くなってしまい、遅滞として先に進まない。それでつい、剣豪小説などに切り替えてしまうのである。

ただし、『ねじ巻き鳥一』の中で、ナイフ一丁で人間の生き皮を手早く剥ぐ技に優れた蒙古人の話がエピソードとして語られていて、そのすさまじい情景描写に強い印象を受けた。だがそれは一つのエピソードに過ぎず、小説全体の展開とはほとんど関係はない。特異な心情を有する作家だな、という感想は持ったが、それ以上展開しなかった。

ところがつい先日、読売新聞で今アメリカで一番よく読まれているのは、村上春樹の『海辺のカフカ』であるといった記事が出ていて、興味をそそられたわけなのである。この作品によってノーベル文学賞の候補にも取り沙汰されているとあって、一層興味が湧き、表題の本を読むことになった。『ねじ巻き鳥一』と同じく、読んでいるとすぐ眠くなって、脇へ打ちちゃってしまうということが続いていたが、二巻目を少し読み込んだ辺りから読む意欲が湧いてきて、一挙に読み切ってしまった。

読後の率直な感想からするなら、この小説がノーベル賞候補となるような傑作小説では断じてありえないという一語に尽きる。随所に、哲学、音楽、文学や詩についての教養を差し挟み、またアメリカの文学やジャズについての蘊蓄を傾けられれば、アメリカ国民としては近親間を持っても不思議ではない。人間精神の不可解さと存在についての不条理をテーマにしているようにも見えるが、それは本家本元のフランツ・カフカが、余すところなく描き尽くしている。私は若い頃カフカの全集を読んだが、自らの目標を決して見失うことのないカフカの執拗にして徹底した精神は、極めて明快にかつ鮮烈に読むものを魅了した。決して読みやすく単純でもないストーリーにも関わらずである。

だが村上カフカは、読み取りにくいその構造にも増して、シュールリアリズムの手

法まで使って、状況の不条理を際立たせようとするが、読者の違和感を払拭出来ず、各状況での物語が、消化不良と言ってよいほどに徹底されないまま放棄されている。

唯一の救いは、トラック運転手の星野青年と過去の記憶を失ったナカタさんとの絡みの部分であるが、死亡したナカタさんの口から、眼も口もないぬるりとした回虫のような大きな虫が這い出てくるシーンなどは、漫画チック過ぎて笑ってしまったほどである。細部の説明不足と思いつきの発想には苦笑を禁じえないが、敢えてそのような描写を試みる大胆さと文学表現への愛は、評価すべきであろうと思う。

蛮勇といわれても良いから何かをぶち壊し提示するその努力は、文学に携わる人間の使命である。少なくとも、村上作品にはそういう姿勢が読み取れる。